

京都市中に現存する能の舞台の造形

横 山 勉*

A study of the formative elements of existing Noh stages in Kyoto city

Tsutomu Yokoyama

Kyoto is a cultural city and has many cultural properties related to Noh. For example masks, Noh costumes, etc. The Oku Noh stage is designated as a national treasure and the Omote Noh stage as an important cultural property. There are some Noh head houses in Kyoto. Kongo-ryu is one of five schools. The purpose of thesis is to clarify the characteristics of Noh stages of the Imahie Shrine, the Fushimi Inari Shrine, and the Ysaka Shrine, which have own Noh stages outside.

1. はじめに

京都は西本願寺の国宝指定の奥能舞台や重要文化財指定の表能舞台をはじめ、能面や能装束など能に関わる多くの文化財を有し、能楽の四座一流のひとつである金剛流をはじめ在京の能の家元があるなど、能に関わりが深い文化都市である。時代の指導者とともに歩んできた長い歴史があり、能を生活芸術として身近に捉え、謡い、囃子や舞を嗜む人々によって支えられてきた。西本願寺の表能舞台では親鸞聖人降誕会に、奥能舞台では平成9年(1997) 桧皮葺屋根修復完成記念に祝賀能が舞われ、八坂神社では正月に神事能が奉納されるなど、明治時代以降演能の舞台は主に屋内の能楽堂へ移ってきたが、社寺の境内・寺内では現在も屋外で行われている。能名所地図一覧¹⁾によると213曲目中53曲目が京都市であり、能の演目の舞台として多くが謡われ、能の文化と関わりが深い地であることがわかる。物まね中心の猿楽能を、幽玄美を理想として能を磨き上げ、今日まで生命が続くほど芸術性を高めた能の大成者であり、能の歴史の創始者ともいえる世阿弥が、はじめて將軍足利義満に對面し演能したのは京の今熊野である²⁾。現在その場所を特定することは難しいが、その演能に関係が深い³⁾とされる社殿のひとつに新日吉神社(現在は新日吉神宮)がある。当時の社殿と規模や社域は異なるが、現在において芸能を奉納するため拝殿を舞台として設えている。今回は京都市中において屋外に能の舞台をもつ新日吉神宮、伏見稻荷神社、八坂神社の3社殿を対象として、その能の舞台の実測調査を中心としてその概要を報告するものである。

2. 新日吉神宮

阿弥陀ヶ峰の西麓、妙法院と智積院の間を東へまっすぐ上る豊国廟への参道の途中に新日吉神宮

* 建設工学科 建築学専攻

は位置する。新日吉神宮は新熊野神社とともに能に縁の深い地と言われている⁴⁾。能の大成者である世阿弥の芸話「申楽談儀」に「観阿、いまぐまのゝ能の時、さるがくと云事をば将ぐん家ろくおんいん御覧はじめらるゝ也。世子十二の年也」とあり、それは応安7年(1374)の頃で、これが京都今熊野での世阿弥と將軍足利義満との最初の対面といわれ、これ以降義満の寵愛を受けることになる⁵⁾。この世阿弥と足利義満との出会いが能の歴史の始まりと言っても過言ではない。その後、豊臣秀吉の強力な庇護、江戸幕府で式楽化を辿る。能の歴史上重要な今熊野は地名として残っているものの、その範囲が広く、場所を特定するまでに至っていない。新日吉神宮、新熊野神社の両社は、永暦元年(1160)に後白河上皇によって御所の法住寺内に創建され、応仁の乱の荒廃後に再興されたと伝えられ⁶⁾、朝廷、武家、一般民衆の崇敬が厚く、壮麗な社殿は失われたが、歴史ある神社として世阿弥と義満の逢瀬が語られている。そのうち、新日吉神宮は能の舞台としての拝殿をもち、そこにおいて御鎮座八百年祭の能楽奉納(日吉式翁)が行われるなど、現在においても能と関わりが深く、祭礼等に、能(翁、狂言)が奉納される。

社殿は楼門、拝殿、本殿と東山へ向って軸線上に並び、社域は楼門、透塀、樹木等に囲まれ、祭礼時を除いて静寂な空間である。御鎮座八百年祭の演能の記録写真(神宮蔵)によると拝殿が舞台として機能し、仮設の橋掛りは設けられず、仮楽屋の社務所より西側の階を経て直接舞台に上がる構成である。舞台の落縁を利用して囃子方は後方(西側)に謡い方は本殿に向って左(北側)に座し、四本柱で囲まれた舞台で能が舞われる。舞台の全方向より演能を拝見することができるが、椅子を仮設した南側が主な観能空間となる。本殿へ向って能を奉納する形式を強く表現した構成である。舞台は桁行一間、梁間一間、一重、入母屋造、銅板葺で、高欄をもつ縁が四周に設けられ、東、西側に階が付いている。舞台床板の厚みは1寸1分で、西本願寺奥能舞台の床板より3分厚いが、床下が亀腹の構造で空間的余裕がなく、足拍子等の音響効果を考慮したものではないと考えられる。舞台に老松が描かれた鏡板はなく、舞台の正面性は希薄であるが、舞台梁下の開口高は東西側が南北側より1尺1寸高く、壁面開放の舞台空間に方向性を与えている。天井は折上格天井で格式のある舞台空間を演出している。舞台の四周は外部に開放され、内外空間が相互貫入しているが、漆喰の下がり壁によって包込まれるような様相を呈している。現在の拝殿は昭和9年(1934)の室戸台風によって倒壊した明治31年(1898)移築の前拝殿を昭和12年(1937)に新築したものである⁷⁾。舞台妻飾として木連格子、猪の目懸魚があり、破風に飾り金物が施されている。飾り金物が付いた隅木に釣灯笼が下がっている。梁下四周に紙垂の付いた注連縄が回されている。柱頭組物は舟肘木であり、二軒の垂木に飾り金物が付くなど、端正な造形の中に典雅な意匠が鑲められている。

3. 伏見稻荷大社能の舞台

京都市街の東方に連なる東山連峰の南端にある標高約300mの小丘陵の稻荷山を背景として、伏見稻荷大社の社殿は拡がっている。平安時代から朝廷が奉幣を行った国家的重要社である二十二社の上七社のうちに加えられた⁸⁾伏見稻荷神社は朝野の崇敬を集めている。「都林泉名勝図会」⁹⁾の中に稻荷社の初午詣の賑わいが描かれ、その当時の町並みが伝えられる京都伏見区深草藪之内町に社殿はある。町並みの中を京中へと延びる伏見街道の一角に「都林泉名勝図会」にも描かれた石の大鳥居があり、それを起点に東方の稻荷山をめざして参道が一直線に本殿へと向かっている。参道を

進み、朱の大鳥居、豊臣秀吉の立願米により天正17年(1589)に造営された楼門を潜り、同年に造営されたと伝えられる外拝殿を回り、数段の石段を登ると、内拝殿・本殿[明応3年(1494)造営]を正面に拝し、その本殿に向って右側の奥まったところに明治15年(1882)造営¹⁰⁾の能の舞台はある。そこでは神楽や祭礼時に舞が奉納される。

伏見稲荷大社の能舞台創建に関わる社務所日誌¹¹⁾によると、舞台の建築場所は神撰所を東へ五間、宝庫を南へ五間引き直したその跡に建てられ、本殿に近く、社殿の位置関係は調和が取れたものとなったと記録されている。舞台は金剛謹之輔(1854~1923 本名=金剛直喜)¹²⁾社中等有志による奉納であり、官費を求めないことが内務省への進達願書に記されている。舞台の正面を本殿と矩折に北に向け、内拝殿・本殿前の向拝空間や社殿間が観能空間となっている。社殿や木々に囲まれ、外拝殿より一段高い位置にある観能空間は、演能空間と一体となった風格のある静穏な佇まいとなっている。

伏見稲荷大社の能舞台に関する管理記録によると、「明治15年3月創建、明治24年正月神楽これまで本社前拝にて奏上のところ本日より能楽殿に改正、明治43年12月屋根葺替、昭和26年11月桧皮屋根葺替、昭和34年11月能楽殿を現在位置に下げ修繕、昭和36年11月屋根棟瓦修復」となっている。昭和34年の改築では内拝殿の建立により能舞台正面の空間の確保が困難となり、橋掛りの全長をあまり変更しないで、本舞台との取付き角度を緩やかにするように能の本舞台を南側後方へ移動し、観能空間を確保しながら本殿との位置関係を巧みに構築している。

能舞台での演能の様子が稲荷神社社務所発行の「稲荷」¹³⁾の第三巻第一號に掲載されている。梅若万三郎翁は病氣平癒の御加護に應えるべく、昭和4年12月2日に神前に能楽を奉納した。「稲荷」掲載写真より当時の能の舞台環境が読み取れる。まず、三千余の観衆が本舞台の三方から取り囲むように、演目の「鉢の木」、「山姥」を静粛に拝覧する様子より、観能空間が十分確保されていることがうかがえる。次に、昭和4年時の能舞台脇座の奥行は現在より短く、橋掛りの本舞台との取合い角度は現在より随分と深いことがわかる。また、正座による観能の姿勢より拝覧の視線は本舞台の床より僅かに低い位置となり、演能の厳肅な雰囲気演出に効果的に働いていると考えられる。

創建時の能舞台の絵図面が伏見稲荷大社に残されており、舞台の変遷を辿ることができる。創建時の能舞台の記載寸法は次の通りである。能楽殿「正面外面マテ三間老尺六寸、妻同四間三尺八寸、丸桁上ハヨリ石口マテ老丈五尺五寸五分、二タ軒出柱真ヨリ茅負外面マテ六尺六寸五分、天井屋根裏、角柱八寸」、橋掛り「桁行五間、梁間老間老尺、軒桁上ハヨリ石口マテ老丈老尺四寸五分、軒出柱真ヨリ茅負外面マテ貳尺七寸五分」、鏡ノ間「正面柱真々老間三尺六寸六分、奥行同貳間五尺、軒桁上ハヨリ石口マテ老丈三尺四寸五分、軒出柱真ヨリ茅負外面マテ貳尺九寸、柱五寸四分角」である。

舞台は桁行一間、梁間一間、一重、正面入母屋造、背面入母屋造、桧皮葺で、飾金物を施された高欄をもつ張り出しの脇座がある。釘隠の六葉飾金具が長押の随所に施されている。脇座の端に擬宝珠を付けた昇降口が備えられているが、後補のものと考えられる。橋掛りは桁行三間、梁間一間、一重、切妻造、桧皮葺で、虹梁には若葉や眉が施されている。舞台と85度の角度をなす橋掛りは鏡ノ間を経て楽屋へ連絡している。後座は桁行一間、梁間一間で、舞台と一体架構の入母屋造、桧皮葺である。舞台と後座の化粧屋根裏天井による舟底と片流の構成は、舞台床下を掘り下げた土間上

に舞台中央へ向って角度を付けて四隅に据えられた4個の素焼の瓶や舞台・橋掛り床回りの羽目板張りとともに音響効果を考慮した造形となっている。舞台・橋掛りの床板は共に8寸で演能における足拍子とともに音響に深い関わりがある。床板の貼る方向は演能者の足の運びと密接な関係があり、一般に多くは定型化している。伏見稻荷大社の舞台の床板は正面へ向って貼られているが、橋掛りのそれは短辺方向に施され、動線と直角となり、一般の舞台の床板の施工とは異なっている。

伏見稻荷大社の舞台のひとつの特徴である、4枚仕立ての開放可能な板戸の鏡板は、一般の能の舞台のように1枚仕立ての板面ではなく、座敷の建具のような構えであり、あたかも室内能が演じられる場であるかのように想起される。板戸には引手金物が取り付けられ、飾金具に唐花唐草文の図案が施されている。板戸の枠で老松が分割され、飾金具が付く等、1枚の大画面に描かれた一般の鏡板とは違った風趣がある。画面の顔料が剥離して下絵の輪郭線が表れている部分があるが、様式化された豪壮な老松の姿を正面にみることができる。切戸口壁面の脇鏡板に描かれた竹も一つの定型を示す様式化されたものとなっている。橋掛り背面の大壁面下方に自己主張を押さえた若竹が散らされて描かれ、鏡板の老松下方の若竹と呼応して舞台空間の拡がりを演出している。現存する一般の橋掛りと異なり、その高欄は手前のみで後方にはなく、横長の壁面が立ち上がっているが、板戸の表面には縦に刻み目が入っており、大壁面の存在感を和らげることに効果を示している。

柱頭組物は舞台、橋掛り共に舟肘木である。水引梁上に桁行一間にひとつの削り貫き墓股が備えられている。目付柱・ワキ柱に取り付けられた精巧な雲龍が彫刻された肘木、シテ柱・笛柱に取り付けられた若葉が施された肘木や虹梁、華麗な獅子が彫刻された墓股等の意匠が鏡板の能画と同様に、全体の簡素な舞台空間の造形の中に華麗さを演出している。能の舞台は妻飾として冢叔首、破風に飾り金具、猪の目懸魚が付き、獅子口が施された桧皮葺の二軒の檜白木造で、鮮やかな色彩の社殿に囲まれながらも全体として簡素であるが、堂々とした風格の中に典雅さを有する造形となっている。「能楽」11巻12月号¹⁴⁾によると、伏見稻荷で観世の家元をはじめ片山氏、金剛氏父子その他の顔ぶれで4日間連続能が催され、その記載の様子より、催能の規模が大きく、それを可能とする能の舞台空間であったことがうかがえる。

4. 八坂神社能の舞台

平安時代末から朝廷が奉幣を行った国家的重要社である二十二社の一社であり¹⁵⁾、朝野の崇敬を集めた八坂神社は四条通の東端に位置し、朱塗りの西楼門が東山通に面して多くの参拝者を迎えているが、正門は南の下河原通りに開かれた南楼門で、石鳥居、南楼門、舞殿、本殿と南北の軸線上に並ぶ。南楼門を入り本殿に向って右側に斎館と矩折れに棟が連なって明治31年(1898)建立¹⁶⁾の能舞台がある。社殿や木々に囲まれた本殿前庭は舞殿を中央に据えて比較的規模の大きな閉鎖的空間を形成し、参拝や神社東の円山公園への人々の往来で常に賑わい、その東南隅部を観能空間として北向きに舞台正面はある。舞台は桁行一間、梁間一間、一重、正面入母屋造、背面入母屋造一部切妻造、瓦葺で、高欄をもつ張り出しの脇座がある。橋掛りは桁行三間、梁間一間、一重、切妻造、瓦葺である。瓦屋根はいくつかの屋根形状で構成されており、重なりの妙がその形姿を際立たせている。舞台と82度の角度をなす橋掛りは鏡ノ間と続き、更に楽屋へと連絡している。後座は桁行一間、梁間一間、切妻一部片流、瓦葺である。舞台と後座の化粧屋根裏天井による舟底と片流の構成

は、西本願寺の表・裏能舞台の天井と同様に音響効果を考慮した造形である。舞台床は足拍子を響かせるために、太鼓の皮のような構造となっており、その板厚は舞台で9寸、橋掛りで8寸となっている。本舞台、後座、脇座、橋掛りのそれぞれの床は無目敷居によって区切られているが、床板の貼る方向は西本願寺の表・裏能舞台と同様であり、板巾は狭く造作されている。舞台床は傾斜していないが、橋掛り床は舞台へ向って橋掛り長28尺2分の内3寸7分高くなる。鏡ノ間より舞台後方へと続く伝い廊下は隣地境界までの僅かな空間や南楼門の築地塀を活用する等、苦心の跡が読み取れる。

舞台の鏡板に描かれた老松は平成10年(1998)に当初の能画を蘇らせるように染筆されている¹⁷⁾。その様式化した老松は江戸城表能舞台の豪壮な形姿とは異なり、端正に描かれている。金泥による金曇の欄引く様はやまと絵系の屏風絵のようであり、典雅な風趣である。脇座の後方に意匠としての貴人口があり、その形姿は社殿や書院の縁の行き止まりとしての脇障子と相似である。柱頭組物は舞台のみで、舟肘木によって構成され、釘隠等の飾り金具は用いられず、舞台・橋掛りの虹梁は眉の彫り込みのみの簡素な造形である。水引梁上に彫り込みの蔓股がひとつずつあり、彫刻図案は外側に八坂神社の紋所である唐花木瓜紋、内側に三つ巴紋を配している。舞台妻飾として豕叔首、破風に飾り金具はなく、六葉釘隠付きの貝頭懸魚があり、二軒で屋根の軒が深く、風格の中に端正な形姿を留めている。橋掛りの背面の壁面には横連子窓が三間連続して備えられ、大壁面による圧迫感を和らげると同時に内部に簾を掛けて演能の様子を垣間見る設えを有し、風趣にして典雅な意匠である。

八坂神社の祭礼である祇園祭と能は深い関係にある。すなわち、八坂神社の大きな行事のひとつである御霊会としての祇園祭において、能から取材して山鉾の題材としたものと考えられるものが多くあり、「芦刈山」、「橋弁慶山」、「白楽天山」、「木賊山」など謡曲のままの名を付したものの¹⁸⁾をはじめ、能と関係がある山鉾は巡行する32基中13基になる。また、「足利義満、祇園会見物の棧敷に世阿弥を呼び入れ同席する〔後愚昧記 永和4年(1378)〕」¹⁹⁾などのように能の黎明期から八坂神社は浅からぬ関係にあり、今日に至るまで多くの芸能の崇敬を集めている。

5. 寸法にみる能の舞台の造形

舞台の間口と奥行

能舞台規矩完成期の代表例として万延元年(1860)の江戸城本丸表書院の本舞台²⁰⁾は方三間(19,5尺)、後座奥行一間半(9,75尺)、脇座の幅半間(3,25尺)、水引梁内法10,5尺、床高2,64尺、主柱0,9尺、橋掛り長52,5尺、橋掛り幅7,35尺、橋掛りと舞台の角度約50度である。伏見稻荷大社と八坂神社の舞台は間口と奥行がほぼ同じで江戸本丸表能舞台の規範に沿いながら、規模は僅かに小さいことがわかる。新日吉神宮の舞台は、文禄2年(1593)の禁中の紫宸殿前に構築された本舞台²¹⁾の方16尺とほぼ同じである。

舞台後座奥行と脇座の幅

伏見稻荷大社と八坂神社の舞台後座奥行は江戸城本丸表能舞台のそれより僅かに小さい。八坂神社の舞台脇座の幅は江戸城本丸表能舞台のそれとほぼ同じであり、伏見稻荷大社の舞台脇座の幅は4,6尺あり、内拝殿新築に伴う舞台移動以前は図面より貴人口幅の約3尺と読み取れ、創建時は江戸

城本丸表能舞台とほぼ同じであったものが後に上げられたと考えられる。

舞台の間口内法と水引梁内法

縦横比をみると、江戸城本丸表能舞台 1,77、新日吉神宮 1,75、伏見稲荷大社 1,67、八坂神社 2,19、西本願寺奥能舞台²²⁾ 1,67、西本願寺表能舞台²³⁾ 1,79 である。八坂神社は横拡がりの強調された形態であり、他の舞台の間口内法と水引梁内法の比はほぼ同じである。

橋掛りの幅、全長と角度

伏見稲荷大社の橋掛りの幅は江戸城本丸表能舞台より僅かに小さく、八坂神社は僅かに大きい。橋掛りの全長は八坂神社より伏見稲荷大社が長い、江戸城本丸表能舞台のほぼ二分の一である。伏見稲荷大社の橋掛りの全長は舞台間口の 1,7 倍、八坂神社は 1,5 倍、江戸城本丸表能舞台は 2,7 倍であり、時代が下ると橋掛りの全長は短くなる傾向がある。橋掛りと舞台の角度は一般に初期は深く、時代を経るに従って浅くなると言われるが²⁴⁾、明治時代創建の伏見稲荷大社、八坂神社の橋掛りと舞台の角度は 80 度以上でかなり浅い。

6. まとめ

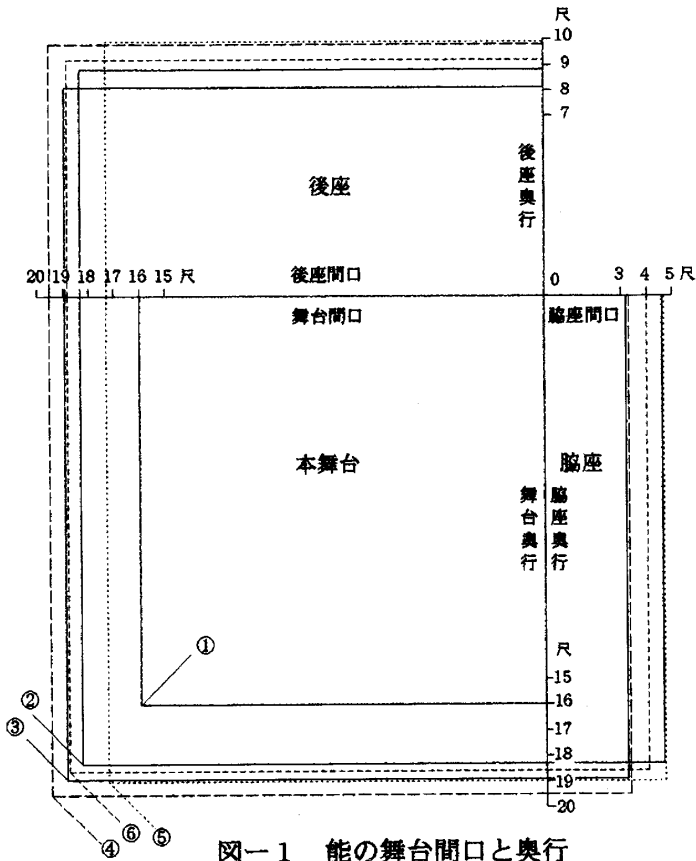
伏見稲荷大社、八坂神社の能の舞台は江戸城本丸表能舞台の規範に沿いながら、それより大規模ではなく、造形の表現は一様ではない。江戸城本丸表能舞台は豪壮な堂々とした造形表現であるが、伏見稲荷神社は全体として簡素でありながら風格のある造形を示し、華麗な彫物の肘木や墓股、引き戸形式の 4 枚板戸の鏡板や橋掛りの能画が彩りを添えている。八坂神社の舞台は全体として簡素であるが、鏡板の優美な能画や橋掛りの壁面の風雅な造作など、典雅な造形表現である。新日吉神宮は比較的小規模な拝殿形式であるため他を圧倒する量感ではなく、高貴な格式のある端正な造形表現となっている。

謝辞 調査に際して、舟橋雅美氏（伏見稲荷大社）、飯塚久美氏（伏見稲荷大社）、中野一樹氏（八坂神社）、水無瀬努氏（八坂神社）、藤島嘉子氏（新日吉神宮）に多大な協力を戴きました。記して感謝申し上げます。

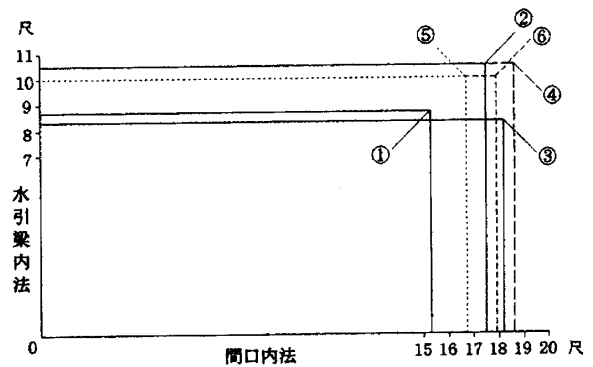
註

- 1) 戸井田道三監修「能楽ハンドブック」三省堂 1993 p260~267
- 2) 西野春雄、羽田和「能・狂言事典」平凡社 1987 p387
- 3) 藤島益雄「新日吉神宮略史」大原出版企画 1972 p2
- 4) 横浜能楽堂編「能楽史事件簿」岩波書店 2000 p47
- 5) 後藤淑「能楽の起源」木耳社 1975 p423
- 6) 竹内理三「角川日本地名大辞典」角川書店 1982 p177
- 7) 藤島益雄「新日吉神宮略史」大原出版企画 1972 p26~39
- 8) 三浦譲「全国神社名鑑」全国神社名鑑刊行会 1977 p90
- 9) 白幡洋三郎監修『秋里籬島「都林泉名勝図会」1799』講談社 1999 p78
- 10) 伏見稲荷大社御鎮座一千二百五十年大祭奉祝記念奉賛会「伏見稲荷大社年表」1962 p298
- 11) 伏見稲荷大社蔵「能舞台建築並びに宝庫神額所位置替願」1882
- 12) 西野春雄、羽田和「能・狂言事典」平凡社 1987 p381
- 13) 伏見稲荷大社「稲荷」1930 p6~7
- 14) 能楽発行所「能楽」1913 p40~46
- 15) 神道文化会「近代の神社景観」中央公論美術出版 1998 p532
- 16) 八坂神社社務所「八坂神社」

- 17) 八坂神社蔵「能舞台改修落慶写真集」
 18) 八坂神社編「八坂神社」学生社 1997 p81
 19) 早稲田大学演劇博物館編「日本演劇史年表」八木書店 1998 p40
 20) 山崎楽堂「能舞台」『野上豊一郎編「能楽全書」第4巻 東京創元社 1979 p12~22
 21) 20)に同じ p32
 22) 北尾春道「国宝能舞台」洪洋社 1942
 23) 22)に同じ
 24) 20)に同じ p21



図一 能の舞台間口と奥行

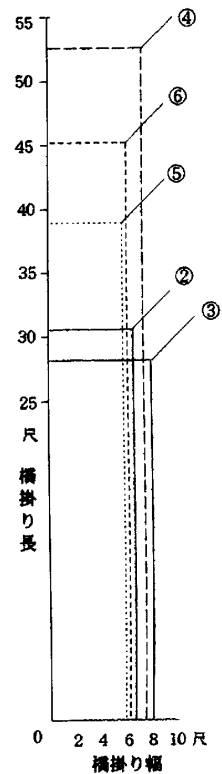


図二 舞台間口内法と水引梁内法

- 能の舞台
 ①新日吉神宮
 ②伏見稲荷神社
 ③八坂神社
 ④江戸城本丸表能舞台
 ⑤西本願寺奥能舞台
 ⑥西本願寺表能舞台

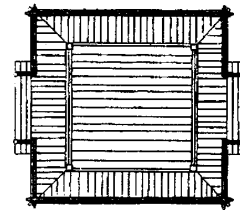
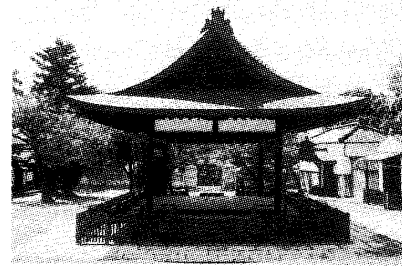
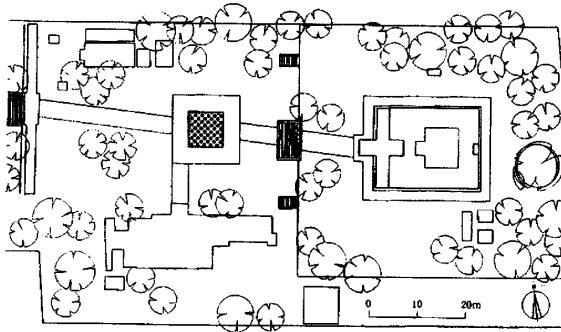
表一 能の舞台主要寸法（単位：尺）

	新日吉神宮	伏見稲荷大社	八坂神社
舞台間口	16,0	18,3	18,9
舞台奥行	16,0	18,3	18,9
後座奥行		8,8	8,1
脇座の幅		4,6	3,2
舞台床高	2,7	2,8	2,8
水引梁高	8,7	10,5	8,3
舞台柱太	0,76	0,81	0,73
橋掛け幅		6,6	8,0
橋掛け長		30,6	28,2



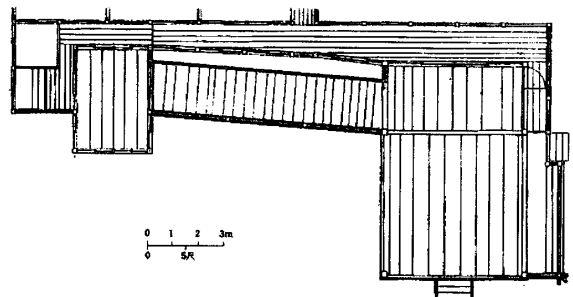
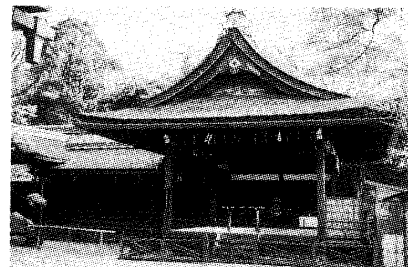
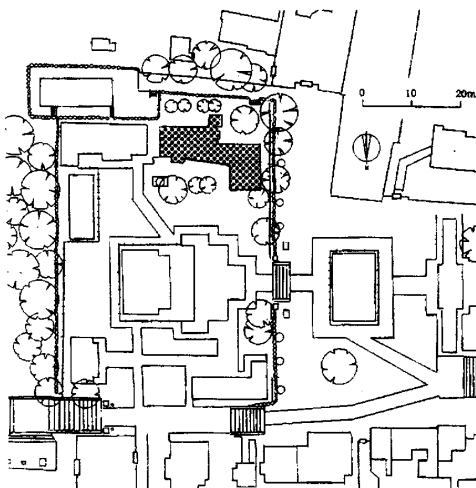
図三 橋掛け全長と幅

①新日吉神宮 京都市東山区妙法院前側町



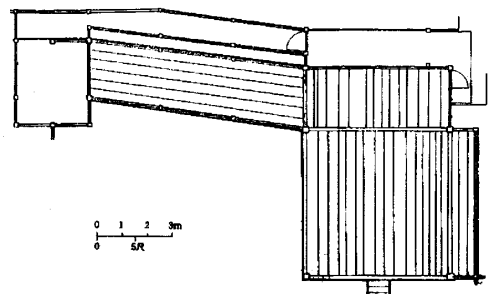
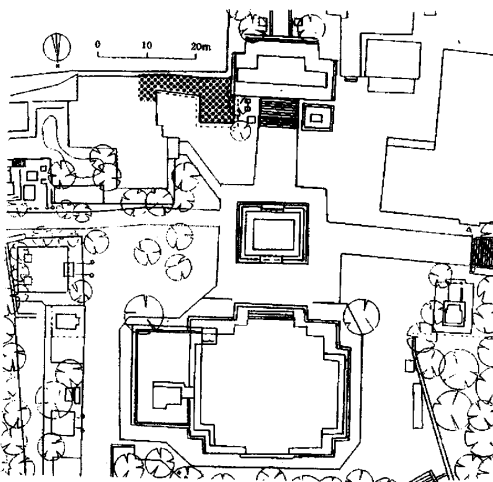
0 1 2 3m
0 5尺

②伏見稲荷大社 京都市伏見区深草藪之内町



0 1 2 3m
0 5尺

③八坂神社 京都市東山区祇園町



0 1 2 3m
0 5尺

図一4 能の舞台配置図・平面図

(平成14年12月2日受理)